



カトリック広島司教区平和の使徒推進本部

2017-2019年度広島教区年間テーマ

チャレンジ 新しい福音宣教 わたしを
— 教会へのチャレンジ — お使いください

祝福を通して、深い喜びが湧いてくる

「主が望まれることは何か。」「どの道を歩めばいいのか。」悩むことは多いですが、その答えは祝福の中にあるように思います。祝福を通して、深い喜びが湧いてくる体験を通して、神様はゴーサインを与えてくださると思います。

私が最近経験した祝福を二つわかちあわせてください。5月の終わりに北九州のカトリック労働者のグループを引率して沖縄を訪ねました。今までこつこつと積み上げてきた沖縄の方々への繋がりの中に本土の仲間たちが出会いを通し、神様の網（ネットワーク）へと招かれ、広がっていく素晴らしい時間でした。二日目の晩は読谷村のうたごえペンション「まーみなー」に宿泊し、8月の平和行事で公演をしてくださる会沢芽美さんの沖縄の痛みの歴史についての歌を聴く時間を過ごしました。その前に時間の余裕があったので、残波岬で夕日を眺める時間をとりました。東アジアをのぞむ大海に沈んでいく夕日を岬の最先端に立ち、柔らかい光をからだじゅうに浴びながら、感謝の祈りを捧げる時間でした。「これでよい」と主が言ってくれているようでした。

6月4日、釜山教区のソン・サムソク教区長の着座式が行われました。釜山教区の活動を知り、連帯を深めていくための道を模索している平和の使徒推進本部としては、繋がりをつくるためのまたとないチャンスです。白浜司教さまにお願いし、シスター古屋敷と私も訪問団に加えていただきました。カテドラルで挙げられた式は、参列したものすごい数の信徒、司祭団、司教たちの、新教区長誕生への心からの喜びが溢れるものでした。何よりありがたかったのは、ソン司教さまが、広島から訪問した私たちを、親戚だけを招いた夕食会に呼んでくださったことです。気のおけない仲間と疲れを癒したいであろうに、私たちを隣の席に招いてくださいました。家族として歓迎したいという司教さまの温かい心が伝わってくる時間でした。司教さまのお父様は、戦前に日本に連れてこられ、山口駅の近くに住んでいたこともある、という広島教区との縁を感じさせられる話もしてくださり、これから釜山教区と広島教区の青年たちの交流が盛んになればよいという希望を分かちあってくださいました。司教さまが私たちに示してくださった温かさの祝福を通して、釜山教区と繋がっていきなさいというメッセージをくださっているように思います。



(白浜司教右隣がソン・サムソク司教様)

信徒の皆さん一人一人が、呼びかけにこたえながら歩いていく道で与えられる祝福をわかちあい、それを紡いでいく中に、広島教区の踏み出していく未来が示されているように思います。祝福を数え、その中にもともしびを探していく心と魂を私たちが培っていくことができますように。

(平和の使徒推進本部アドバイザー 中井淳神父)

現代世界における課題を見る目を養うために

先日、川崎市の無差別殺傷事件や中央省庁の事務次官まで務めた元官僚が自分の息子を殺すという痛ましい事件が起きました。

事件の被害者、加害者に対して、色々な思いや意見があるとは思いますが。しかし、その事件そのものを見るのではなく、もっと根本的な原因をキリスト者としての目で見ることがあるのではないのでしょうか（福音の喜び 50 参照）。そのための目を養うために私たちは何を基礎にすればよいのでしょうか？

現代の日本で生活している大半の人は、競争する社会の中の強い精神的圧迫のかかる中で生きています。日本の基本的な生活環境は物質・技術やサービスなどが飛躍的に躍進し便利で快適な生活ができるようになってきました。例えば、24 時間開いているコンビニ、いつでもつながる電話やインターネット、いつでも商品注文ができるオンラインショップ、その商品を翌日には配送する宅配便などさまざまなものが便利になり生活の質の向上に寄与しています。

そのため、品物の大量生産、品質のよい商品の製造、過剰ともいえるサービスや少しでも利益を上げるために労働者をはじめとする人間は、ますます過酷な状態においこまれている現状があります。24 時間サービスを提供するのであれば、深夜に働く人も必要でしょうし、経済が成熟している日本では右肩上がりの経済からフラットもしくは右肩下がりの経済の中でいかに大量生産し、しかもある一定の品質をもって、さらに利益を上げるのかという問題からコストダウン、機械化・効率化、損失を少なくするために低賃金での労働を強いられたり、外国人労働者に職場を奪われたり、労働市場のミスマッチや経営者からの強いプレッシャーやストレスのある労働環境があるといった状況が起きているのではないのでしょうか。

教皇フランシスコは「福音の喜び」の中でこのような現状を「現代世界における課題」（第二章 1）として取り上げています。

- 排他的な経済のこと。例えば、貧困化する人や家庭があるにもかかわらず一方では過剰なサービスとして賞味期限がきた食料は販売せず大量に廃棄しているという現状のこと（同 53）
- 貨幣という新しい偶像崇拜のこと。例えば、いわゆる勝ち組になって、ほかの人より多く賃金をもらえる仕事、企業、役職（競争して昇進）など貨幣を基準としたかのような考えを持つ人が増えていること（同 55）
- またその貨幣を基準とすることにより、格差が生まれ暴力を生んでいること。例えば、川崎市の無差別殺傷事件や自分自身への暴力としての自殺などは、職に就けないこと、職場でのプレッシャーや低賃金による貧困化などで競争社会から疎外された人のいわゆる勝ち組と負け組との格差に起因する暴力のこと（同 59）

を指しています。

現代社会でのこのような課題を課題として認識するためには、私たちキリスト者は社会の事象をキリストの目をもって、現状を見つめ（表面的なことばかりではなく、その現状の背景まで見る）、キリストの心をもって、現状を分析や識別する必要があります。

そして、現状を認識したのち、キリストの働きによって、現状を打開するための行動をキリスト者的に起

こす必要があります（福音を伝える使命、隣人に使える使命を全うする）。宣教といってカトリックの教義を他人へ教えることをいうのではなく、キリストの教えにしたがった行動を起こすことです（隣人愛をもって行動すること）。

キリストを倣うものとして、キリストの目（神の目）のものの見方、識別、行動するために、キリストはどういったときにどのような行動なされたか、聖書をよく理解しなければなりません。そのためには聖書をよく読むことが必要です。幸い広島教区は今、聖書通読や聖書書き写しを奨励しています。また、キリストに倣って私たちが行動するためには、キリストとの会話が大事になると思います。一生懸命の祈り、祈ることによる霊性のたかまりが必要です。

そういう筆者も聖書をあまり読んでいないし、祈りも少ないと感じています。でも幸いに教会敷地内が職場なので出勤時の聖体訪問での主の祈り・アヴェ・マリアの祈り・栄唱、始業前に毎日のミサの音読、始業の祈り（初めの祈り）、昼休憩時のお告げの祈り（昼）、食前食後の祈りを続けていこうと思います。さらに家で忘れがちな（忘れてる！）目覚めたときの祈りと床につく時の祈りやロザリオの祈りができればなお良いと思っています。が、自分の意志だけでは弱いので、ここで聖霊の助けをもとめ、「聖霊来てください。あなたの光のかがやきでわたしたちを照らしてください・・・信じる者の心をみたま光よ、あなたの助けがなければ、すべてははかなく消えてゆき、だれも清く生きてはゆけ（ません）」（聖霊の続唱）と祈ってみよう。

（平和の使徒推進本部事務局スタッフ 竹内 秀晃）

－「教会へのチャレンジ」のヒント－

福音の喜び（第二章）

教皇フランシスコの使徒的勧告「福音の喜び」の抜粋を紹介しています。

今月から第二章に入ります

第二章 危機に直面する共同体

50 福音化の活動に関する根本的問題を扱うにあたり、まず手短かにわたしたちが生活し、活動しているのはどのような社会背景においてなのかを思い起こしたいと思います。（中略）わたしが提案したいのは、福音に基づいた識別にもっと近づく視点です。それは、「聖霊の光と力によ

て養われている」、宣教する弟子の見方です。

51 （前略）わたしは、全共同体に「時のしるしを検討するつねに目覚めた能力」をもつよう勧めます。（中略）神の国がもたらす収穫と、神の計画に対する脅威とを的確に区別しなければなりません。それは、よい霊と悪い霊それぞれの働きかけを見分け解釈するだけでなく、よい霊を選び悪い例の働きかけを拒否する——これが決定的なことなのです。（後略）

Ⅰ 現代世界における課題

52 （前略）現代の大半の人々が、痛ましい結果

を招く不安定な日々を送っていることを忘れてはなりません。（中略）わたしたちは、多くの場合は顔の見えない、新しいかたちの権力の源となる、知識と情報の時代に生きているのです。

排他的な経済

53 「殺してはならない」というおきてが人間の生命の価値を保障するための明確な制限を設けるように、今日においては「排他性と格差のある経済を拒否せよ」ともいわなければなりません。（中略）飢えている人々がいるにもかかわらず食料が捨てられている状況を、わたしたちは許すことができません。これが格差なのです。現代ではすべてのことが、強者が弱者を食い尽くすよ

うな競争社会と適者生存の原理のもとにあります。(中略)人間自身もまた使い捨てのできる商品同様に思われています。わたしたちは「廃棄」の文化をスタートさせ、それを奨励してさえいます。もはや単なる搾取や抑圧の現象ではない、新たなことが起きています。(中略)排除されるとは「搾取されること」ではなく、廃棄物、「余分なもの」とされることなのです。

54 (前略) 他者を排除する生活様式を維持するために、また自己中心的な理想に陶醉するために、無関心のグローバル化が発展したのです。(中略) まるですべては他人の責任で、わたしたちには責任がないかのようです。(後略)

貨幣という新しい偶像崇拜

55 わたしたちは、貨幣が自分たちと自分たちの社会を支配することを、素直に受け入れてしまったのです。(中略) わたしたちは、新しい偶像を造ってしまったのです。真に人間的な目標を欠く、貨幣崇拜と顔の見えない経済制度の独裁というかたちで、古代の金の雄牛の崇拜(出エジプト 32・1-35 参照)が、新しい、冷酷な姿を表しているのです。(中略) なによりも人間らしい方向感覚の欠如、その深刻さを示しています。(後略)

56 (前略) 権力欲と所有欲には際限がありません。利益増大のためにすべてを食い尽くすこのシステムにおいては、自然環境のような傷つきやす

いものはすべて、神格化され絶対法則へと変換された市場利益の前に無防備なのです。

奉仕せずに支配する貨幣

57 このような態度の背後には、倫理の拒否と神の否定が潜んでいます。(中略)「自分の財を貧しい人々と分かち合わなければ、彼らの財と生命を奪うことになる。これらの財はわたしたちのものではなく、貧しい人々の所有なのである」。

58 (前略) 富む者は貧しい者を助け、敬い、励まさなければならいということです。(後略)

暴力を生む格差

59 (省略)

60 (前略) 軍備拡張競争は、より堅固な安全保障を要求する人を欺くためだけに役立ちます。(後略)

文化的課題

61 (前略) 各人が自分の主観的な真理だけを主張したがるような文化では、市民が個人の利益と願望を乗り越えて、共通の目標に参加することが難しくなるのです。

62 (前略) マスメディアからの過度な影響によって、新しい行動様式が出現してきています。……その結果、マスメディアとエンターテインメントの負の側面が現れ、伝統的な価値観が脅かされているのです」。

63 (前略) 洗礼を受けている者の一部が教会への帰属を実感していないのは、小教区や共同体の中に人を受け入れない雰囲気や構造が存在することや、人間生活に大なり小なり生じる問題に対する官僚的態度にあることも認めなければなりません。(後略)

64 (前略) とくに変化に敏感な少年・青年に層が、方向性を見失うことが多くなりました。(中略)「この教えを不正義、すなわち基本的人権に反しているとする者が、わたしたちの文化の中にもいます。このような主張は大抵、道徳的相対主義の形式に従っています。道徳的相対主義は、矛盾を抱えつつ、個人の権利の絶対性を信奉することとつながっています。こうした見地からは、教会は特定の先入観を助長し、個人の自由に干渉していると認識されているのです」。(中略) この社会はわたしたちに、情報をすべて同じレベルものとして、無差別にもたらしめます。そしてわたしたちに、倫理上の問題が生じた際、ひどく表面的な捉え方をさせることになるのです。(後略)

65 (前略) わたしたちが提示するとき、人間の尊厳と共通善に対する同じ確信からそれをおこなっていることを示すには、かなりの努力を必要とします。

66 (前略) 結婚を、どのような形式であっても成立し、各人の感じ方次第で変更できる、単なる感情的な満足のかた

ちにすぎないかのように捉える傾向があります。しかし、結婚は社会に対し不可欠な貢献をなし、当事者二人の、感情のレベルや一時的な必要性を超えるものです。フランスの市教団が教えているとおり、結婚は「本質的に、一時的な恋愛感情にではなく、生涯にわたる婚姻関係を始めようという夫婦によって交わされた約束の奥深さに」由来するのです。

67 ポスト・モダンとグローバル化の時代に特有な個人主義は、人と人の間きずなの成長と安定性を弱め、家族のきずなの本性も変えてしまう生活様式に加担しています。司牧活動においては、父なる神とのつながりが、人と人の間きずなをいやし、促進し、強める交わりを求め養うということをさらに示さなければなりません。(後略)

信仰が文化に根を下ろすにあたっての課題

68 (省略)

69 福音を文化に根づかせるためには、文化の福音化が急務です。(中略) 長期間にわたる計画が必要だったとしても、文化の福音化の新たな過程を促進しなければならないでしょう。いずれにしても、わたしたちはたえず成長するよう呼びかけられていることを忘れてはなりません。(後略)

70 (前略) ここ数十年間、カトリック信者の世代間のキリスト教信仰伝達において、

断絶があったことも認めざるをえません。多くの人々が幻滅を感じ自分をカトリックの伝統を受け継ぐ者とせず、また自分の子どもに洗礼を受けさせず祈りを教えない親も増え、他の宗教団体に改宗する人も相当数いることは否定できません。この断絶の原因として、家庭での会話不足、メディアの影響、相対的な主観主義、市場が扇動する過度の消費主義、困窮者に対する司牧的な同伴の不足、心から人を受け入れない教会のあり方、多元的な宗教の状況において信仰への神秘的賛同を再興することの困難さ、などが挙げられます。

都市の文化における課題

71 (前略) わたしたちは、都市を観想の目で見なければなりません。すなわち、家々や通り、広場におられる神を見いだすことのできる信仰の目です。(中略) 神の現存は作られるのではなく、発見されるもの、覆いを取り除いて明らかにされるものです。(後略)

72 (省略)

73 (前略) 今日、そうした広域での変化と文化においてこそ、現代の新しい福音宣教が優先的に行われるべきです。都市の住民のためには、斬新さを特徴とするとともに、より魅力的で意味のある交わりと祈りの場を創出するよう求められています。(後略)

74 神との関係や他者との関係、環境との関係を築

く方法を明らかにする福音宣教、基本的な価値を確立する福音宣教が必要とされています。(後略)

75 (前略) 家々や地域社会が、人々を結びつけ一つにするためにではなく、ますます人を孤立させ防御するために整えられているのです。これらのことを踏まえた福音の告知は、人間のいのちの尊厳を回復するための基礎となるでしょう。イエスは都市にいのちを豊かに注ぎ入れることをのぞまれるからです(ヨハネ 10・10 参照)。(後略)

教皇フランシスコ使徒的勧告
「福音の喜び」(カトリック中央協議会)



司教区昇格60年

今年の6月30日は広島教区が司教区昇格から60年の年です。

6月30日の年間第13主日のミサの中の共同祈願で中国地方に神の民の一部として司教区を与えて下さった神に感謝を表明してみたいかがですか？

1923年5月4日

広島使徒座代理区設立
(大阪司教区より分離)

1959年6月30日

広島司教区へ昇格